

日本乳幼児教育学会・第29回大会

幼児期の社会性発達を支える保育実践とは

-発達・保育研究からの示唆-

遠藤 利彦
(東京大学)



The Center for
Early Childhood Development,
Education, and Policy Research

● OECDレポート(2015)が掲げる「非認知」

“Skills for Social Progress : The Power of Social Emotional Skills”

- 「認知」「非認知」スキルが予測する多様な心理社会的適応
- 所得は「認知」だけでは説明され得ない→「非認知」の重要性
- 「非認知」→「認知」の因果関係は“robust”: その逆因果は×
- ターゲットとする「非認知」=「社会情緒的」スキル
- 個人および社会における生産性への寄与が期待されるもの・成長可能性が見込まれるもの・測定可能なもの
- 「**長期的目標の達成**」 / 「**他者との協働**」 / 「**感情の管理**」
- 「スキルがスキルを生む」(Skills beget Skills)
- 殊に社会情緒的スキルの土台を就学前期に築くことの重要性
→ “**Starting Strong**” 「人生の始まりこそ力強く」

自己と社会性の力＝「非認知」

- 「自己」にかかわる心の性質（→個性化）
（自分を大切にし、自分を律し、自分を高めていくための力）
「自尊心/自己肯定感」・「自己理解」・
「自制心/グリット」・「自立心/自律性」 など
- 「社会性」にかかわる心の性質（→社会化）
（集団の中に溶け込み、人との関係を作り維持していくための力）
「心の理解能力」・「共感性/思いやり」・
「協調性」・「道徳性」・「規範意識」 など
- 両側面に関わる「感情の制御・調節」



Education 2030

(OECD)

『“vuca”な世界を生き抜く力』

Volatility (激動)

Uncertainty (不確実)

Complexity (複雑)

Ambiguity (曖昧)

Agency (責任主体性) / Co-agency (共同主体性)

- マッシュマロ・テスト: ウォルター・ミシェル 1970年～追跡調査
- 幼稚園4歳児を対象
- 「1個、すぐに食べてもいいけど、15分待っていられたら2個あげるね」
- 1/3が待って2個もらう→その後の学業成績や社会的成功を長期的に予測
- 幼児期の「IQ」(認知)以上に「**自制心**」(非認知)が重要
 - *ただし、その後の追試研究では同様の結果が得られないこともしばしば
- 「異時点間の選択のジレンマ」(アリとキリギリス) / 「自他間の選択のジレンマ」
- それは社会性にも強く影響をもたらす: 自己利益中心にばかり行動すると仲間の信用を失って長期的には集団の中で幸せになれない(「将来の影」)

「異時点ジレンマ」と「自他間ジレンマ」の間

- 自己制御の二相: 日常的に子どもは同時に複数の動機づけに駆られ得る。今の衝動的な自己欲求充足は、未来の利得を遠ざけるだけでなく、他者からの信用を低下させることにも通じ得る。

「相互独立的自己」と「相互協調的自己」の間

- 子どもは発達早期から文化固有の感情的社会化の実践の下に在る。日本の子どもは、相対的に「異時点ジレンマ」よりも「自他間ジレンマ」の解決により動機づけられる可能性も。

『自己制御』

- 異時点間の選択のジレンマ(満足遅延)
「今の1個か、もう少し先の2個か」
- 自他間の選択のジレンマ
「自分が先に乗るか、仲間を先に乗らせるか」
- その時々々の状況に応じた柔軟な制御の形
時には「今」を優先することも必要
時には「自」を優先することも重要
- 時には2つのジレンマに同時に直面する
その調整力もまた自己制御の一側面

“reality”^(現実)と“positive illusion”^(肯定的幻想)の間

- 肯定的幻想は子どもが動機づけを維持していく上で重要だが、一方でそれによる過大な自己評価は、現実のコンピテンス獲得に負に作用することも。養育者はいつから何に基づいて、またいかにして、子どもの「脱錯覚」を促し、正当な自己評価を子どもの中に根付かせ得るか？

「間主観的社会化」と「第三者的社会化」の間

- 養育者は子どもの感情の直接的な共感者・制御者としても、文化に潜在する暗黙の感情の経験・表出ルールのコーチとしても、関わる。時には感情経験・表出の観察学習のモデルとしても機能する。養育者における、その多重の役割間にどれだけの整合性があるのかが、子どもの感情の社会化の質に影響を及ぼし得る(→感情経験・表出の“desirability”と“typicality”)。

● 「非認知」の発達を支え促す大人の役割

● オープンな感情的風土

大人は成育環境の情動的風土を醸成する

● モデリング / 社会的参照

大人は「非認知」のモデル / 参照枠となる

● 随伴的応答性

大人は子どもの感情を制御 / 調律する

● 感情の教師・コーチ (Emotion Talk)

大人は感情の聞き役・語り部・指南役となる

「第一者(当事者)視座」と「第三者視座」の間

- 生来的な公正感と自己利益充足欲求の間に葛藤が生じる状況で、幼児はしばしば後者に従った行動に駆られる(他には厳しく自には甘く)。第三者視座で「他」と同様に「自」を律し得るようになるのは、いつ頃からいかにしてか→U字型パターン？

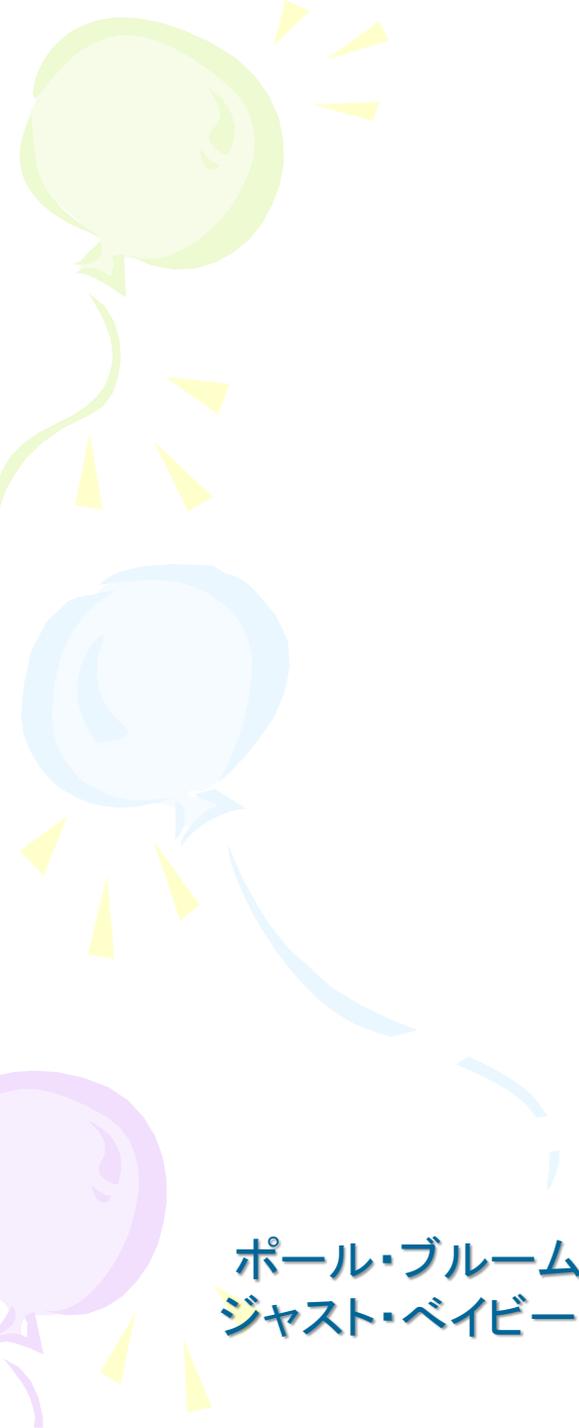
“ruler” と “supporter / facilitator”の間

- 自他間の選択のジレンマに自を優先した行動を繰り返すことが、「将来の影」につながることを子ども自身が実体験の中で気がつくことを見守り、支え待つか。子どもの中から“ruler”が出てくることを待つか？それとも、保育者が、あるタイミングで、暗黙のルール of 明示的な教示者としてふるまうか？

「性善説」か「性悪説」か？

- ヒトは、「見境なく」助けるよう生まれつき、選択的に助け、時に欺くよう社会化される
- 「志向性の共有」
- 「私たち志向性」
- 互惠性・社会的規範
- 集団同調の両刃性
- 内集団ひいき
- 外集団ぎらい

マイケル・トマセロ (2013).
ヒトはなぜ協力するのか. 勁草書房



- **ヒトの赤ちゃん**
- 「ずる」をきらい、「公平」「公正」を当たり前のことと考える
- 意地悪をきらい、親切を好む
- 悪いことをした人を罰することを好む

公共財ゲーム(Public Good Game) ①

- ここに4名のプレイヤーがいて、それぞれ100万ずつお金を持っている。各プレイヤーはそれをそのまま自宅に持ち帰ることもできるが、ある賭けをすることによってもっと多くの金額を入手することもできる。その賭けとは、もし参加者の一人が、自分の持っているお金から、いくらかを賭け金入れの「銀行」に入金すると、その銀行は、その入金した額の2倍を平等の割合で4人の参加者すべてに分け与えるというものである。もし、すべてのプレイヤー全員が100万を銀行に入金すると、銀行はその総額400万の2倍、すなわち800万を等しく4等分して、200万ずつ各プレイヤーに分け与えるという訳である。つまり、この賭けでは、プレイヤー全員ができる限り多くの金額を銀行に入金することが、この4人のグループにとって明白な利益となることになる。さて、もしあなたがこの4人のプレイヤーの一人だとしたら、どのようにふるまうだろうか。

- 3人が100万を銀行に入れ、1人がそのまま100万を懐に抱え込んでいたら、 $300 \times 2 = 600$ 万が4等分され、1人あたり150万手にすることになるが、この場合、銀行に入金しなかった1人は $100 + 150 = 250$ 万を手にすることになる。
- 2人だけが100万を銀行に入れ、2人がそのまま100万を懐に抱え込んでいたら、 $200 \times 2 = 400$ 万が4等分され、1人あたり100万手にすることになるが、この場合、銀行に入金した2人は辛うじて元金100万を取り戻すことになる。だが、入金しなかった2人は逆に $100 + 100 = 200$ 万を手にすることになる。
- 1人だけが100万を銀行に入れ、3人がそのまま100万を懐に抱え込んでいたら、 $100 \times 2 = 200$ 万が4等分され、1人あたり50万手にすることになるが、この場合、銀行に入金した1人のもとには結果的に50万しか残らないことになる。だが、入金しなかった3人は逆に $100 + 50 = 150$ 万を手にすることになる。

公共財ゲーム (Public Good Game) ②

- 上と同じ賭けだが、共通の賭け金入れの銀行にお金を入金しなかった者を罰することができるとしたらどうするか。その罰とは、入金しなかった者に、100万のうちの15万円の罰金を科すというものであるが、その罰は、特に入金した他のプレイヤーに配分される訳ではない。それどころか、入金拒否者を罰することを選択したプレイヤーも、実験リーダーに5万を支払わなくてはならない。

(→利他的懲罰)

“caseness”（事例性）と“illness”（疾病性）の間

- その子を事例たらしめていることの本質は、（疾病・障がいに関わる）内在的要因なのか、（関わりの累積的失敗や気質と環境の適合性の低さ等による）外在的要因なのか？その見極めの確かさが、支援の形を大きく変え得る。

“care”（養護・支援）と“education”（教育）の間

- その子の問題・病理・障がいに合理的配慮を行う必要がある一方で、それが、他児との「見えない」境界を暗黙裡に引いてしまうことをいかにして避け得るか？あるいはを最低限に止め得るか。一人に特化した関わりと集団の一構成員としての差を設けない関わりのバランスをいかにとり得るか？

“主体性”と“規律性”（教育）の間

A decorative graphic on the left side of the slide features three balloons: a green one at the top, a light blue one in the middle, and a purple one at the bottom. Each balloon is attached to a thin streamer and has several small yellow triangular shapes around it, resembling confetti or streamer tails.

情緒的利用可能性の大切さ

発達心理学における強調点の移行

「感性」



「情緒的利用可能性」

(emotional availability)

- 大人はいつも子どもの状態を気にかけて、その後ろを心配してついて回ったり、転ばぬ先の杖になろうとして先回りしたりするのではなく、どっしりと構え、子どもが求めてきた時に情緒的に利用可能な存在であればいい

→ アタッチメントの基本原則

- 逆に言えば、特に必要とされない時は、子どもの活動にあえて踏み込まない(侵害的でない)ことが重要

情緒的利用可能性 ⇒ 子どもを主体とした概念

個人の特性としてではない二者関係の特質

(養育者と子ども)

養育者の側の要因

- ・敏感であること
- ・侵害的でないこと
- ・環境を構造化すること
- ・情緒的に温かいこと

子どもの側の要因

- ・応答的であること
- ・養育者を相互作用に巻き込むこと

情緒的利用可能性

読み取り / 応答

FALSE
ALARM

あり

HIT

的確な読み取りと応答

あり

なし

CORRECT
REJECTION

侵害的でないこと

内的状態 / シグナル

MISS

なし

構造化(「黒子」) + 温かい情緒的雰囲気(「応援団」) → 発達の足場を築く

子どもとの関係性の基本

- 安心の基地/安全な避難所である: 基本的にどっしりと構え、あちこち不規則に動き回らない
- 子どもがシグナルを送ってきたら応える
- 弱って帰ってきたら情緒的に燃料補給してやる
- 大人の方から子どもが1人でやっていることに踏み込むことを極力しない(「黒子」として支える)
- 心理的に寄り添いつつ、離れたところから「応援団」として温かく見守り、時折、声かけなどしてエールを送り、子どもの自発的な活動を励ます